

大正十五年四月二十四日第三種郵便物認可

昭和十七年六月二十日印刷 昭和十七年六月一日發行

第十七卷

第七號

三田文子

七月



贈呈

す

人形物語 (3)

花柳章太郎

『大隅太夫と團平』

浪花女の最高潮の場に春子太夫を大隅に改めさせ、太十を稽古する件がある様に、實際團平のため大隅太夫は死闘して學んだことは事實だ。志度寺、國姓爺、合邦、妹背山、鰻谷その他の多くを團平に學び、ついに團平補修の壺坂を一代の語り物とした人であるが、大隅太夫が紋下になつた時、それ迄は大隅には座蒲團を敷かせなかつた人だが、一度大隅が紋下に据えられるや、大隅に與え、自分は蒲團を敷かず、稽古をしたさうである。

そしてその室には誰も置かず妻女のおちかも退け、「苟くも櫓下に與つた人なら、自分が稽古をつけるとしてもその貫録を持せねばいけない。お前も退つて居ろ」と云ふので、二人だけで稽古をしたと云ふ逸事もあつたとのことだ。

大隅太夫の話で榮三師は、自分に直接見た話を多く持つて居て、順次に語り出して呉れた。

「大隅さんの鰻谷に就いては體が寒くなるやうな思ひをしたことがおます。その前に鰻谷を語つた時、お妻は清十郎が遺

こしてはつて（最も多く榮三氏に教へた古老）母と彌兵衛が奥へ入つてから子供に言ふて聞かす所で下へおり、床几に腰をかけ煙草盆で花火線香に火を點け、それであやし乍ら言ふ振りをして居られました。清十郎は人は中々古い方で知らぬことは知らぬと言ふて居られましたが、記憶のよい方でこの花火線香を使ふなぞも昔からきいてある型やらふと思ひます。」

これも三宅氏の文樂物語に、大隅太夫の妻だつた人が、所謂、惡魔に魅せられたのであらふ。ある時〇〇〇〇〇〇をした。大隅はそれをフト知る羽目に出會つた。元來藝だけの人だ。日常無茶苦茶の限りを行つたと云ふ。

日常が正しくない點で彼は割に世の中に疎んぜられたと云ふ意見さへある位だ。さう云ふ無茶者の大隅が、右の事實を偶然我家の二階に感じたのであつた。

見る／＼大隅は怒りに慄へた。鬼のやうに彼は怒りに相を變へた。正に双物沙汰に及ばうとしたが、何かの事情か何かの思案の結果か、そこまでは事は進まずに納まつたのであつた。

「實感の鰻谷」

後でお妻八郎兵衛の「鰻谷」を語る事になったとき、彼は「よし」とうなづいた。

そしてそれを床に上すと、實に大變な出来であつたと云ふ。聞く者がその異常な力と熱情に壓倒されて、更に大隅の眞價が新らしく人の口に上るに至つた。

彼曰く「俺の鰻谷はいゝだらう。間男される八郎兵衛は俺でないと本當に語れないぜ。」と、云つたさうである。これを聞かされた大隅に近しい者は、右の〇〇〇〇の内情を知る丈に思はずヅツとしてしまつたわけである。

一言で云ふと大隅の如き、所謂バルザック型である。天才のせゐもあるが義太夫の上で確に何十年、或は百年の中に一人しか現はれぬ人物に違ひない。その異常な人間がこの異常事に出會ふ。そこで初めて傑作「鰻谷」が出来上る。義太夫とは斯う云ふものであらうか。三宅周太郎氏の文樂物語を引用して見ても、この實感を持つた大隅の天才藝の鰻谷は悲壯であつたに違ひない。

重の井に就いて

畑違ひで我々の方であまり淨瑠璃ものは演らないが、しかし時折、劇中劇で途方もないデン／＼物を演らなければなら

昭和十七年度 國民映畫 脚本募集 情報局

大東亞戰爭遂行下映畫、演劇に課せられたる使命は愈々重大である。仍て情報局は昨年度に引續き本年度も廣く優秀なる脚本を募集して、國民映畫國民演劇樹立促進の一助とすることとなつた。ここに期待するものは生硬なる時局、便乘的なものではない。雄渾なる國民理想と健全、明朗、清醇なる國民生活とを表現し、藝術的價値に於て高く、且又我々に歡びと潤ひと力とを與へるものである。

應募規定

一、題材、構想、年代は問はざるも必ず未發表の創作たること。但し映畫の場合は劇映畫脚本に限る。
二、枚數 映畫脚本は、四百字詰原稿用紙百五十枚以内。但しシナリオ形式に限る。
演劇脚本は、四百字詰原稿用紙五十枚以上二百枚以内、何れも別に三枚以内の梗概を附すること。

三、締切 昭和十七年九月末日
四、送先 東京市麹町區永田町一ノ一情報局第五部第二課、封筒に「國民映畫應募脚本」或ひは「國民演劇應募脚本」と未書のこと。

五、賞金 (映畫) 情報局總裁賞 二篇各金貳千圓
(演劇) 情報局總裁賞 二篇各金貳千圓

六、審査員 (映畫) 伊藤大輔、田坂具隆、内田吐夢、内田岐三雄、牛原虛彦、野田高梧、八木保太郎、溝口健二、島津保次郎(イロハ順)
(演劇) 長谷川伸、上泉秀信、長田秀雄、中野實、久保田万太郎(イロハ順)

七、入選發表 (映畫) 昭和十八年一月中旬
(演劇) 昭和十七年十二月上旬

八、其の他 應募原稿の第一面に必ず現住所、職業、略歴氏名(筆名)の場合は本名を明記のこと。應募原稿は返却せず。入選作品の著作權は情報局に歸屬す。入選作品の誌上發表並に映畫化又は上演は情報局に於て斡旋することあるべし。募集についての問合せは一切應ぜず。

なかつたり、又、所作ものを踊らされたりして閉口することがある。

私も師匠譲りの「俠艶録」などで重の井の子別れや、紙治の小春、梅忠の梅川など、昔は演らされたものだ。

一度六段目の千崎彌五郎を演り、勘平の鬢の栓をぬく（鬢の根がぬけて腹を切つてから勘平の髪を亂れる仕掛）のがわからなくつて、元結をと云つても勘平は麻で結んであるのだが、それを解いて髪がザンバラになつて、師匠に舞臺で撲ぐられたことがあつた。

現在では東京に女形が少くないので師匠の重の井など舊派にも一寸ない逸品である。

師匠の重の井は故人糸八の型であつて、由留木殿館でなく、本陣の奥座敷でやり、「ま一度顔」の件から廻つて玄關の敷臺で演るのが、糸八工風のものであることを聞かされた。

その事を榮三師に話したら……

「それが本當だす。由留木殿館で演る方が見だてが立派だすさかい、文樂でも花丸の繪襖、塗り柱でやりますが、本文にある『敷臺の段箱に身を伏し』の文章から見てさうでせう……いや重の井で思ひ出して、この間も今度出たら一度それで演つて見やうかと思ふとんだすが、重の井の出に『お乳の人は大高にお菓子さま／＼文庫に盛入れし／＼と立出で』云々の個所ですが、大高ちゆうよつて皆大きい高杯と思ひます

健康讃歌



海は紺青 野山はみどり

眞夏のひかり 朗かに浴び

潑刺 燃ゆる 健康のいろ

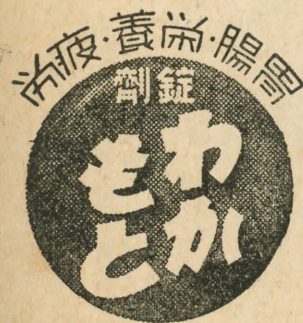
培ひくれし 日々の醒あかもと

高鳴る血汐 あふるゝ元氣

苦難の波も 希望で乗り切る

疲れを知らぬ 強き体力

養ひの親 醒あかもとこそは



東京 かわとも本舗

美術特輯

表紙(原色版) 人勝殘闕雜張
巻頭口繪 圖版十六頁
特價一圓・送料四錢

が、あとのお菓子さま、文庫に盛入れとありますよつて、文庫に菓子盛つて、大高と云ふのは高杯でなく紙の名やとわては思ひます。それで思ひ出すのが菅原の傳授場で、源藏が相承に傳授を受ける時、『大高段紙の位に負け』と云ふ文章がおます。それから見ても大高ちゆうのは紙の名と思ひます故、文庫に菓子を盛り、道中である故旅館のことであり、馬方に渡すにさそくにさうしたんやと思ひます。宿屋で演るのは衆八さんの型だすかそれはおもしろふおますな……」

私はこれ迄聽てもう芝居へ行く時間に迫られて居るのに氣が付いた。榮三師も樂屋入りの時間なので、私も暇をつけることにした。榮三師は大の天ぶら好きと聞いて、明日天ぶらを兩方の打出し後、相生さんを誘つて喰べる約束して出やうとし、フト先刻入る時、氣が付いた二階の人形のことを訊ねたら、

「あれだつか。あれは狐だす。浪花女の時使ふた吉野山のものだが、今迄フランネルで造るだつけど、あの時は兎の毛を手に入れて自分で造つたのだす。……お前一寸持つてお出

で……」

おかみさんを二階に取り上がらして、のぼりの布に包んだ先刻見たのを出して見せて呉れた。

松王か、それとも文樂にあまり他に使用しない俊寛、或は盲景清？と思つて居たら意外にもそれは自作の狐であつたのに、私は驚いた。でも餘程榮三師はそれに愛着があると見え、

「これ皆、自分で作りましたんや。尻尾だけ取つて別にしておかんと毛に蟲がつきましてな。」

別に葛籠の中にあつた尻尾を持ち出し、胴につけて、自分で遣つて見せて呉れた。

「芝居の方には使ひまへんが、わての方は忠信の出にこれを使ひ、「谷の鶯」の間に上手の櫻に消えると、下から忠信になつて出ます。」

襟卷のやうな形に置かれた狐も、一度榮三師の手にかゝると眼光鋭く、胴體、尻毛に迄生命が入つて魂ある生物となつて動く……。私は感心した。

「狐は初代玉造はんはうまいもんだした。あしたは玉造はんのケレン物に就いて話しましょう。」

連枝窓から這入つて來る折柄の秋の陽ざしに、その白狐は一際目立つて生き／＼と眼が光つた。

停 定價 金五拾錢 (郵税二錢)

昭和十七年六月二十日印刷 (毎月十回)
昭和十七年七月一日發行 (一日發行)

東京市芝區三田 廣澤齋 編輯

編輯者 和木清三郎

發行者 西脇順三郎

東京市芝區芝町二丁目十四番地

印刷者 渡邊丑之助

東京市芝區芝町二丁目十四番地

愛宕印刷株式會社

電話二八八六、四三二〇

東京市芝區三田廣澤齋塾內

發行所 三田文學會

振替口座東京三七五〇五

東京市神田淡路町二ノ九

配給元 日本出版配給株式會社

金 料 費			
普通號一部	五十錢	二錢	
半ケ年	三圓平錢	稅共	
一年	分七圓	稅共	

右購讀料金は一ケ年四回發行する定期特輯號料金を加算したものであります。

一月、五月、八月、十一月號を定期特輯號といたします。

口尙、臨時特輯號發行の場合はその都度既納購讀料より差額を申受けます。

和木清三郎

編輯後記

小説は、日野君の「徒歩連絡」と、先頃上海から歸京した栗本君の「罪を求めて」と、山本和夫君の推舉する齋藤女史の「愛の生理」は、本誌には初めてである。「詩」は蔵

原君の「菜園」と、長田君の「パレンパンの歌」誦すれば脈々たる風韻を感じるは流石である。

マ矢崎君の「二葉亭」と、古谷君の「濱田廣介と宮澤賢治」の續稿、グリムの一文は塾獨文出身

高橋君の譯出したものである。マ大野林火、石田波郷兩氏の句を戴いた。俳句界の次代を約束されたかうした方々のものを、

つづいて掲載して行くつもりである。

マ「三田劇談會」は滿洲を見學して歸つた方々の「滿洲劇界」について開催したのであつたが、

遂に締切までに原稿が間に合はず次號にのびさざるを得なかつたのは残念であつた。

マ「久保田万太郎句集」は、六月

中旬に「三田文學出版部」から發賣された。全句集から著者自ら厳選したもの約五百句餘が収録された。三宅三郎君の「歌舞伎劇鑑賞」は印刷製本幅轆のため、七月中旬にならなければ出来ない。表紙は鳥居清言畫伯の八色刷で、これは近頃美事な豪華版とならう。

マ既刊の「學生に與ふ」「王城山莊隨筆」「福澤諭吉模放」「眞珠の胎」も、それぞれ版を重ね、賣行好況であるのはありがたい。

マ水上先生の三周忌は、そのかみ先生のお宅で開かれてゐた水曜會に出席してゐた人々が主となつて六月三日夜、借樂園で御家族の御出席を得て開催、先生への追慕の一時を過した。

マ「水上先生記念事業」も、もと全集編集實行委員の手によつて成案を得次第發表する筈である。先般、先生の藏書の大部分を塾圖書館に寄贈されたものを「水上文庫」として創設、今後、

水上先生の知己及び三田文學關係者の著作の刊行される毎に、これに加へ、將來は立派な「文庫」としたい意企を持つてゐる。マ尙、先生の御命日二十三日を永く忘れないため「二十三日會」を結成し、七月から毎月集る事になつた。御同好の皆様のお出席をお待ちしてゐます。場所は何れ決定次第お知らせいたします。

マ八月號は、恒例により「銷夏隨筆特輯號」として七月二十五日に發行の豫定である。

マ「三田文學」が書店で入手出来難いといふお問合せが屢々であるが、紙が少く當分部數は増大出来ないから、豫約されるか直接本社に年極を申込まれるやうお勧めします。

マ先月號でも申上げた通り編輯所を左記に設けた。書籍、雜誌の寄贈、原稿その他一切の事務は同方へ願ひたい。

東京市麴町區平河町二ノ十三

三田文學編輯部

和木清三郎